

カフカの『田舎医者』

—癒やせないトラウマ—

佐々木 博康

Kafka's *Ein Landarzt*

—Exempel eines unheilbaren Traumas—

SASAKI, Hiroyasu

大分大学教育学部研究紀要 第40巻第2号

2019年3月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 40, No.2, March 2019

OITA, JAPAN

カフカの『田舎医者』

―癒やせないトラウマ―

佐々木 博 康*

【要 旨】 本稿は、カフカの『田舎医者』を、この物語がカフカの無意識が表現された夢であるという仮説のもとに、夢解釈の手法を使って分析するものである。この物語にはカフカのどのような心の問題が表現されているのかを解明する。明らかになったのは、この物語がカフカのトラウマの克服の試みとその挫折を描いているということである。カフカは子供時代に暴君的な父親から強い精神的圧迫を受け、人間同士の権力関係に過敏となった。このことは大人のカフカにも強い影響を及ぼしている。カフカが作品において人間同士の権力関係を執拗に描くのはそのためである。権力関係に対する過敏さはまた、カフカの性機能不全をもたらしている。性行為が男性による女性への権力的圧迫、一種の暴力行為と感じられてしまい、心理的な抵抗が生じるのである。

【キーワード】 トラウマ 夢解釈 父親コンプレックス 性機能不全

はじめに

1917 年 4 月の初めに書かれた短編『田舎医者』は、カフカの全作品の中でももっとも不可解な作品と言ってよいだろう。

物語は大きく、医者が出発するまでを語る前半と、病気の少年の家のようすを語る後半に分かれる。吹雪の夜、医者は遠くの村に重病人が出たという知らせを受け取るが、馬車につなぐ馬が死んでしまったため出かけることができない。豚小屋のドアを蹴ると、そこには見知らぬ馬丁がいて、二頭の馬を馬車につないでくれる。女中のローザ (Rosa) が手伝おうとして近寄ると、馬丁はいきなり彼女を抱きしめ、頬に歯形をつける。医者の馬車が疾走し始めるとき、家に逃げ込んだ女中を追って馬丁が玄関のドアを壊してしまう音が聞こえる。ここまでが前半である。後半は馬車が一瞬にして患者の家に着くところから始まる。患者の少年を診察した医者は、少年の腰のあたりに大きなバラ色 (rosa) の傷を発見する。傷にはウジがたかっている。少年は医者に助けを求めるが、医者は傷が致命的なものであることを知っている。どうしてもできないでいると、家族と村の長老たちが医者の服を脱がせる。学校の先生に率いられた合

平成 30 年 10 月 31 日受理

* ささき・ひろやす 大分大学教育学部言語教育講座 (ドイツ文学)

唱団が家の前にいて、服を脱がせれば医者には治してくれるだろう、治すことができないなら殺してしまえ、という内容の歌を歌う。裸にされた医者は少年のベッドに運ばれ、横に寝かされる。絶望している少年は医者には、先生を信用していない、ベッドを窮屈にしているだけだから目をえぐり取ってやりたいくらいだ、と言う。医者は、傷は森の中で脇腹をむき出しにしていたために斧で打たれてできたもので、たちの悪いものではないと慰める。少年は医者という言葉に信じて静かになる。医者はすぐさま持ち物をかき集め、裸のままで部屋を抜け出す。なかなか進もうとしない馬車に乗って雪の荒野をさすらいながら、もう医者への仕事はおしまいだろうと嘆く。

このように『田舎医者』はきわめて幻想的な作品である。非現実的な出来事が次々に起こるが、それらの間のつながりはまったく不明である。読者は理解できないまま、一つのイメージから別のイメージへと引っ張られていく。この物語が私たちに与える印象は、夢のそれと酷似している。

周知のように、カフカは日記において「書くこと」を、「僕の夢のような内面生活の描写」¹⁾ であるとしている。また、『ミレナへの手紙』の編者であるヴィリー・ハースは、カフカの作品全体について次のように述べている。

私の考えでは、カフカは彼の作品を、少なくともその萌芽においては「夢見た」のである。つまり彼の天分は、その独特の夢のリアリズム、その独特の夢の密度、その夢の論理において、全体の構成や構造でさえも本質的には「夢」の方式において機能していたのである。²⁾

研究者もカフカの作品と夢の類似性に言及している。『田舎医者』に限っても、ヴァルター・H・ゾーケルが「物語のダイナミズムは、夢のそれである」³⁾ と述べているし、ハンス・H・ヒーベルもこの物語の「夢の論理 (Traum-Logik)」⁴⁾ について語っている。

カフカはさまざまな素材を集め、それらを構成して物語を作り上げるというタイプの作家ではない。自分の「肉体と魂を全面的に開放して」⁵⁾ 憑かれたように一気に書き下ろすというのがカフカのやり方だった。フェリーツェ・パウアーへの手紙で述べているように、「僕を利用しようとする、あるいは利用している、ある高次の力 (eine höhere Macht)」の「きれいにみがき抜かれた道具」、つまり鏡となって書くのである⁶⁾。一種の自動筆記である。その場合、通常の作家の作品以上に、書かれたものにした人の無意識が反映する可能性があるだろう。

本稿では、『田舎医者』をカフカの無意識が表現された夢であるという仮説のもとに、夢解釈の手法を使って、この物語からカフカのどのような心の問題が読み取れるかを分析していく。ただ、フロイトの理論をそのまま機械的に適応するわけではない。

1. トラウマに向き合うことへの心理的抵抗

話の大枠は、深夜呼び出しを受けた医者が病気の子供を治療しに行くが、治すことはできず、家族の手前もあり、逃げ出してしまうというものである。最初に結論を述べておくと、田舎医者は大人のカフカであり、傷ついている少年は子供のカフカである。医者が少年の傷を治療するというのは、大人のカフカが、子供のときに自身が受けたトラウマを癒やそうとしていることを表している。自身のトラウマをなんとかしたいと思っているのだが、うまくいかない

いう話なのである。

物語は大きく前半と後半に別れている。医者の子の場面が前半、患者の家の場面が後半である。まず、前者から見ていく。

(1) 前半——出かけることへの抵抗

「私はとても困った状態にあった (in großer Verlegenheit)」⁷⁾ というのが物語冒頭の文である。物語上では「困った状態」というのは、重病人がいてすぐに出かけなければならないのに、馬車につなぐ馬がないことを指している。しかし、ここにはもっと深い意味があるだろう。つまり、カフカ自身が「困った」状態にあることを示唆しているのである。カフカは生きる上で何らかの悩みを抱えている。

さて、田舎医者は「困った状態」にある。遠くの村に重病人がいるのですぐに出かけなければならないが、馬がないので診察に出かけられない。これはカフカの心の葛藤を表している。重病人がいるということは、カフカの心が安らかではなく、何らかの問題を抱えているということである。何とかするためには、出かけなければならない。カフカの無意識はそれを求める。しかし、カフカの意識の方は自身の問題と向き合いたくない。そのために、馬が死んだために行けないという理由づけがなされる。昨夜酷使されたために突然死んでしまったといういかにもとってつけたような理由づけであるが、カフカの意識はとにかく行くことを阻止するための状況を作り上げる。女中が馬を借りるために村中を駆けずり回ったが成果はなかったと念押しまでしている。

ところが意識のこのような策動は役に立たない。無意識の方が、なんとかして意識に心の問題に気づいてもらおうと障害を取り除くからである。田舎医者は「なんということもなく」、「もう何年も使われていない豚小屋のドア」を蹴る。するとそこから突然、見知らぬ馬丁が二頭の馬を連れて現れる。馬がないことで出かける必要はなくなったと安心している意識に、無意識は馬を用意して出かけるように迫ってくるのである。「私はどう言ってもいいかわからず」とあるように、出かせないための口実がなくなった意識はショックを受ける。不安になるが、意識はそれを隠す。『自分の家にどんなものがあるか、わからないものですね』と彼女(＝女中)は言い、私たち二人は笑った」と述べられている。医者は何でもないことのように語る女中に同調して笑う。意識は余裕を見せることで、無意識に対抗しようとするのである。

馬が出現したために、医者が出かけられない障害はなくなった。しかし、この状況は意識にとっては「困った状態」である。そこで再度、障害を作り出す。馬具を渡すために女中が馬丁に近寄ると、馬丁は突然女中を抱きしめ、「自分の顔を彼女の顔にぶつける」。つまり、馬丁は女中にキスしようとしたのである。叫び声を上げて逃げてきた女中の頬には「赤い跡となって二列の歯形」が刻み込まれている。女中は家の中に逃げ込み、玄関の鍵をかけるとともに部屋中の明かりを消す。しかし、馬丁はドアに「突進」する。そのためドアは「めりめりと裂け、粉々になる」。カフカの意識が出かけられない理由の第二弾として持ち出すのは、読者を唖然とさせる出来事である。馬丁が獣性をむき出しにして女中を襲うので、出かけられないとするのである。医者は馬丁に、「おまえも一緒に来るんだ(……) さもないと、私は行くのをやめろ。どんなに差し迫ったものであってもだ」と言う。つまり、女中が襲われるのであれば、自分は「行くのをやめろ」と宣言しており、女中への襲撃が行かないための口実となっていることがわかる。カフカの意識はそれほどまでに出かけることに抵抗している。

このように物語の前半は、出かけることに抵抗するカフカの意識と、出かける必要性を知り、意識に出発を迫るカフカの無意識とが激しくせめぎ合っている。非現実的なイメージの連続は、このような意識と無意識のせめぎ合いが次々に生み出しているものである。ただ、そのために使われるイメージがなぜ馬であり、また女中への襲撃なのかについては後半も見た上で考えていく。

(2) 後半——トラウマとの遭遇

重病人のいる村は 10 マイル離れたところにあると言われてたのに、馬車は「一瞬」のうちに田舎医者患者の家に運ぶ。カフカの意識の抵抗にもかかわらず、無意識は強引に意識を心の奥へと導く。

患者の両親と妹が迎えてくれ、医者はすぐに病気の少年を診察する。熱はないが、目はうつろである。少年は医者の方眼に口を寄せて、「ぼくを死なせて」とささやく。医者は周りを見回し、少年の言葉を聞いた者が誰もいないことを確認する。ここでも意識の抵抗が見られる。医者は少年が重病であることを認めたくない。ところが少年の「ぼくを死なせて」という言葉は、重病のように聞こえるので、家族に聞かせたくないのである。

心配そうに見守る家族の手前、医者は「頭を少年の胸に載せ」てみる。診断は次のようなものである。「少年が健康であるというわかりきったことが確認される。少し血のめぐりが悪くなっているだけで、心配する母親にコーヒーを飲まされすぎているが、健康で、ベッドからつつき出すのが一番いいということ」。少年も少年の家族も病気に苦しみ、医者に治してもらおうとしている。しかし医者はあくまで患者が重病であることを認めようとしない。

医者は診察を終えて帰ろうとする。しかし、「母親が（……）涙を一杯ためて唇をかみ、妹が血だらけのタオルを洗っている」のを見ると、突然これまでの考えを改める。

私はなんとなく (irgendwie)、少年がひょっとしたら (vielleicht) 本当に病気かもしれないということを、場合によっては (unter Umständen) 認めてもいいような気がしてくる (bereit)。

カフカの無意識は、涙をためた母親や血だらけのタオルを洗っている妹の姿を持ち出し、逃げよう、逃げようとするカフカの意識に注意を促し、トラウマに対峙するようやんわりと導いていく。「なんとなく」、「ひょっとしたら」、「病気かもしれない」、「場合によっては」、「認めてもいいような気がしてくる」——一文の中に盛り込まれたこれらの、断定を避け、発話を曖昧化する表現は、一方では意識の側に依然として抵抗が存在することを示すものではあるが、しかし他方では、意識がしだいに自身の傷の認知に近づいていくことができるようにするためのものでもある。

彼（＝少年）は私に向かって微笑む、まるで私がとびきり精のつくスープでも運んでくるかのように——ああ、今二頭の馬がいなくな。その声はおそらく、診察を容易にせんがための天の配剤なのだ——そして今度は私にはわかる、確かにこの少年は病気だ。

今度は医者は少年が病気であることをはっきりと確認する。そしてそのとき、少年の傷が開く。

彼の右側、腰のあたりに手のひら大の傷がぱっくり開いた（hat sich ... aufgetan）。

少年に最初から傷があったのではなく、医者が少年が病気であることを確信したから、傷が出現したかのようなのである。夢が状況に応じて新しいイメージを展開していくのに似ている。

傷を見た医者は、ただちにそれが致命的な傷であると診断する。医者は心の中で少年に次のように語りかける。

かわいそうに。君は助からないよ。私は大きな傷を発見した。脇腹のこの花のために君は破滅するのだ。

医者は一見しただけですぐに命にかかわる傷であると診断する。この医者態度もまた、トラウマにこれ以上かかわりたくないというカフカの意識の逃避願望と関連しているだろう。

少年は「助けてくれる？」とすすり泣きながらささやく。医者は、家族の期待や、いつのまにか患者の家にやってきた客たちからの期待を痛いほど感じる。しかし、同時に反発もする。

（この地域の人々は――引用者注）絶えず不可能なことを医者に求める。かつての信仰を彼らは失ってしまった。牧師は家にいて、祭服を一枚一枚引きちぎっている。しかし医者は繊細な外科医の手があるのだからと、どんなことでもするように求められる。さあ、もう好きにしてくれ。来たくて来たわけじゃない。おまえたちが私を聖なるお務めに利用しようというのなら、どうぞ勝手に。

カフカの意識は抵抗を示しながらも、自身のトラウマを認めるところまではいった。しかし、それ以上のこと、つまり傷を癒やすことはできないと拒絶する。

ここから物語はその幻想の度をいっそう強める。医者は家族と村の長老たちによって服を脱がされる。いつのまにか学校の合唱団が家の前にいて、奇妙な歌を歌う。

「その者の服を脱がせよ、さらば癒さん。／癒さぬなら、殺してしまえ。／ただの医者にすぎぬ、ただの医者にすぎぬ。」

裸にされた医者は、頭と両足をつかまれ、少年のベッドに運ばれる。人々は医者を少年の横、傷のある側に寝かせ、部屋を出て行く。歌はやむ。

この奇妙な展開は、一つ前の引用にある、医者の中の不満のつぶやきの言葉、「信仰」、「牧師」、「祭服」、「聖なるお務め」がもたらしたものである。つまり、言葉が出現すると、それに応じてイメージが生み出されていくのである。この点も夢に似ていると言えよう。こうしてまるで何らかの宗教儀式が執り行われているかのように物語が進行する。聖なる雰囲気があるのは、癒やしと関わっているからである。

この奇妙な儀式は、傷を癒やすことを拒むカフカの意識に対して、業を煮やした無意識が強制行動に出たものであると解することができる。トラウマとの対決を避け続ける意識を、無意識が無理矢理トラウマに向き合わせようとしている。子供たちの歌の歌詞、「癒やさぬなら、殺

してしまえ」には、有無を言わせぬ強迫的なところがある。トラウマを抱えている限り、大人のカフカにとって生はありえないということが無意識は伝えているのである。

ベッドで医者と少年の奇妙な対話が始まる。

「ぼくは先生のこと、ほとんど信用していないんだ。(……)自分の足で来たわけじゃない。助けてくれるかわりに、ぼくの死の床を窮屈にしている。先生目をえぐり取ってやりたいくらいだよ。」

少年は助けを求めていた先ほどまでとは打って変わって、きつい言葉を医者に投げつける。「自分の足で来たわけじゃない」という言葉には、カフカの意識がトラウマと向き合うことをいやいや行っており、いつでも逃げようとしていることへの非難が込められている。「先生目をえぐり取ってやりたいくらい」は強烈な表現であるが、欧米の小説では誰かに怒りをぶつけるときの慣用的表現として時折見かけるものである⁸⁾。ただここでは、カフカの意識が自分の傷に対して盲目であることを揶揄するものともなっている。

少年の言葉に対して医者は、「君の言うとおりで」とあっさり首肯する。二人の対話は次のように続く。

「(……)でもとにかく私は医者なんだ。どうしたらいいかね。実際のところ、私にも簡単なことじゃないんだ。」「そんな言い訳を受け入れろって言うの？ ああ、そうしなければならいんだろうな。ぼくはいつも受け入れなければならないんだ。美しい傷をつけてぼくは生まれてきた。それだけがぼくの持参金だったんだ。」(……)「君の間違いはね、広い視野を持たないことだよ。そこらじゅうの病人部屋を全部訪れたことがある私だから言うんだが、君の傷はそんなにたちの悪いものなんかじゃないよ。斧のとがった角で二度打たれてできたものだね。森の中じゃ、だいたいみんな脇をむき出しにしており、斧の音をたいてい聞き逃すものだ。(……)」「ほんとうにそうなの？ それとも熱でぼうっとしているぼくをだましてるの？」「ほんとうにそうだよ。医務官が誓って言うんだから、受け入れなさい。」すると彼はそれを受け入れ、静かになった。

傷だけが自分の「持参金」だったと絶望的に言う少年に対して、医者は「そんなにたちの悪いものなんかじゃない」と慰めを言い、森の中で脇をむき出しにしていたために斧によってつけられた傷だと説明する。日常的論理からはわけのわからない説明であるが、夢において私たちがそのような論理に納得してしまうことがあるように、少年もその説明を受け入れる。

医者は少年を癒やしたのだろうか。そうではない。医者は病気が致命的なものであると診断しながら、たいしたことはないとごまかし、最後には「医務官が誓って言うんだから、受け入れなさい」と強弁することで「静かに」させただけである。

医者は結局何もできずに、患者の家をこっそり逃げ出す。衣服、毛皮のコート、カバンをかき集め、服を着る間も惜しんで、馬に飛び乗る。「革ひもはだらだらと引きずられ、馬と馬はほとんどつながっておらず、車はよろけながら続き、毛皮のコートが一番後ろで雪をこすっている」状態である。「雪の荒野」であるにもかかわらず、田舎医者は裸のままである。「そら行け！」と馬を疾走させようとするが、来たときとは違って今度はゆっくりとしか進まない。子供たち

の歌が背後で響く。

「喜べ、患者よ、／医者が添い寝をしてくれる！」

子供たちのこの歌は医者によって、「間違った歌 (der ... irrtümliche Gesang)」とされる。子供たちは医者が逃げ出したことを知らず、医者の添い寝によって患者の傷が癒やされることを祈りながら歌っている。だから「間違った歌」なのである。本来なら、この歌は医者に良心の呵責をもたらすはずである。だが、田舎医者の頭を占めるのは、「繁盛していた医者家業はおしまいだ。後釜に盗み取られる」という思いである。そして、

裸で、この不幸きわまる時代の寒気にさらされて、この世の馬車と、この世のものではない馬たちとともに、老いぼれ男の私はさすらっている。

と、不幸を「時代」のせいにして、「老いぼれ男」と自嘲するだけである。物語は、

だまされた！　だまされた！　夜中の間違い呼び鈴にひとたび応えようものなら——もう決して取り返しがつかないのだ。

で終わる。呼び鈴を「間違い呼び鈴 (Fehlläuten)」と呼んで、そういったものには応じるべきではなかった、と後悔している。

呼び鈴は無意識の警告である。心の奥底に問題があることを、無意識が意識に告げ知らせている。心の問題は「重病人」がいるという形で表現される。意識は、傷を負った少年というトラウマをかかえた過去の自分に会う。医者は少年が病気であることを認める。少年の傷をはっきりと目にする。だが、結局何もできずに患者の家をこそこそと逃げ出す。患者のことはそっちのけで自分の身のことばかり考えている。つまり、カフカの意識は自身のトラウマを確認するところまでは行ったが、それに対処しようもなく、再びごまかしてしまったのである。自分の傷に蓋をしてしまったのである。

崩壊寸前の馬車に乗って、いつ家に着くかもわからないまま、「雪の荒野」を裸でさすらっている田舎医者の状態は、ゾーケルが指摘するように、カフカのアイデンティティがばらばらになっていることを示しているだろう⁹⁾。傷を癒やさない限り、カフカの自我は四分五裂のままなのである。

2. 傷とは何か？

(1) 傷は性的トラウマ

以上見てきたように、この物語は、大人のカフカが子供時代に受けた自分のトラウマを癒やそうとするが、それができずにすごすごと退散する顛末を描いている。だが、カフカのトラウマとは何なのだろうか。これについても結論を先に述べれば、カフカのトラウマは性的問題と関連しているのである。

少年の傷の描写を詳しく見てみよう。

彼の右側、腰のあたりに手のひら大の傷がぱっくり開いた (hat sich ... aufgetan)。バラ色をして (rosa), 濃淡はさまざま、奥のほうは黒ずみ、縁に向かうにつれて明るくなり、少しざらつき、血がまだらにこびり、鉱山の入口のように広がって。離れて見るとそう。近くからはさらに深い傷が見える。これを見ると思わずそっと口笛を吹きたくなるほどだ。私の小指のような太さと長さの蛆虫が、そもそもバラ色なのにその上血まみれとなって、傷の内部にへばりつき、白い小さな頭とたくさんの小さな足を動かし、光のほうへ身をよじらせている。(258)

気味の悪い描写である。カフカが作品で書いたものとしては読者にもっとも吐き気を催させる描写である。この傷こそカフカのトラウマである。「手のひら大の傷 (Wunde) がぱっくり開いた」の後に続く文の冒頭、「バラ色をして」は原文では rosa となっている。文頭に置かれているので大文字で Rosa と表記されている。「傷がぱっくり開いた」の後に突然 Rosa という語が現れると、読者がまず思い浮かべるのは、物語の前半で馬丁に襲われていた医者の中中のローザ (Rosa) であろう。続けて呼んでいけば、Rosa はここでは単に「バラ色をした (rosa)」という形容詞として使われているだけであることがわかるにせよ、女中の Rosa を一瞬でも連想しない読者はいないと思われる。フロイトが指摘したように、言葉の類似性はそこに隠された意味があることを示している。バラ色の傷が女中 Rosa が受けるであろう傷、性的暴行による傷と関連しているのは明らかである。

一見すると物語の前半と後半はほとんど何の関係もないかのように見える。しかし、少年の傷が rosa と形容されることで、前半と後半の結びつきが見えてくる。前半では、馬丁がローザを襲う。二人は今どこにいるだろうか。おそらく「私のベッド」である。後半で患者の家を逃げ出す医者は、「来たときと同じように馬が急いでくれるなら、私はいわばこのベッド (=少年のベッド) から私のベッドに飛び込むことになるはずだ」と思う。ここで二つのベッドがつながる。馬丁と女中のローザが「私のベッド」にいる。裸になった医者が rosa 色の傷を持つ少年のベッドに横たわっている。馬丁とローザ、医者と少年は対になっている。さらに言うなら、少年の rosa 色の傷には、リッチー・ロバートソンも述べているように¹⁰⁾、女性器を思わせるところがある。

このように、医者と少年の共寝には男女同衾のイメージが重なっている。しかし、実際には医者による少年の治療行為として描かれている。この二重性が意味しているのは、カフカにとって性行為が治療を要する問題となっていること、そして傷が少年の傷となっていることから、この問題がカフカの過去のトラウマと関係しているということである。

(2) 何が問題か？

何が問題となっているか、もう少し具体的にわかるだろうか。それは性機能不全である。少年のときに被ったトラウマのために、カフカは性機能不全に陥っているのである。このことははっきりさせるために、前半と後半をさらに比較してみよう。

まず、馬丁と田舎医者を比較してみよう。両者の違いはどこにあるだろうか。馬丁は動物的である。豚小屋の奥から「四つんばいで這い出て」くる。女中のローザに対してはいきなりその性的欲望をむき出しにする。抱きしめると頬に「二列の菌形」をつけるほど激しくキスをす

る。ローザが家に逃げ込んで鍵を掛けても、突進してドアを粉碎してしまう。医者が言うように、まさに「ケダモノ」であるが、性的欲望という面ではあふれんばかりのものを持っている。それに対して、医者は *rosa* 色の傷をつけた少年のベッドから逃げ出してしまう。少年の傷は医者によって「この花」と呼ばれ、少年によって「美しい傷」と言われるが——「花」が「美しい」を連想的に呼び起こしている——、医者の目に映るのはすでに見たように、ウジが湧いている不気味なものでしかない。医者と少年のベッドが性行為の場であるとするなら、ここには性的欲望は皆無であると言える¹¹⁾。

次に、馬に注目してみよう。この物語では馬についての言及が何度もある。医者の家での馬と少年の家での馬の振る舞いの違いを見ていく。

前半、馬丁の誘導で馬が豚小屋から出てくる。そのようすは次のように描写されている。

「どうどう、兄ちゃんよ、どうどう、姉ちゃんよ」と馬丁が大きな声をかけると、二頭の馬が、力強く、たくましい脇腹をした動物が相次いで、両脚をぴったりと体につけ、形のよい頭をラクダのように下げて、胴体をくねらせることによってドアから出てきた。ドアは馬の体でぴっちりとなった。しかしすぐに馬たちは、脚を伸ばし、体からもうもうと湯気を立てながら、すつくと立ち上がった。

ここでの馬は力にあふれ、しなやかで、生命力にあふれている。「体からもうもうと湯気を立てながら」という箇所などは、生き物としての熱気を感じさせる。医者も「これほどすばらしい馬をつないだ馬車に乗ったことがない」と思う。実際、馬丁が「そら行け！」と声をかけると一気に疾走し始める。

後半の少年の家では、馬はどんなようすだろうか。医者の家から少年の家へ「一瞬」で走り抜けた馬は、「静かに止まる」。少年のところでは馬たちは自分で外から窓を開け、「それぞれが一つの窓から首を突っ込み、家族がわめこうが動じることもなく、患者を見守っている」。馬は非常におとなしい。まるで少年の病気が癒えるのを待っているかのようなのである。医者が通り一遍の診察で、少年には何も問題がないと診断したときには、再度の診察を促すかのようにいなく。医者は、「ああ、今二頭の馬がいなく。その声はおそらく、診察を容易にせんがための天の配剤なのだ」と思う。そしてすぐに、「確かにこの少年は病気だ」と確信する。裸にされた医者が少年のベッドに横たわっているときには、「窓から入り込んだ馬たちの首が影のように揺れる」。医者がベッドに入り、ようやく少年を癒やしてくれそうになっているのを喜んでいるかのようなのである。医者が何もできずに逃げることになり、馬たちに「そら行け！」と馬丁と同じように声をかけたときには、馬は来たときとは反対にのろのろとしか進まない。馬たちが意気消沈して、いやいや少年の家を離れようとしているかのようなのである。このように、馬たちは明らかに少年の傷が癒やされるのを期待していたのである。

ここで思い浮かぶのは、フロイトの精神分析理論である。フロイトは、人間の本能的衝動を表すエスを暴れ馬に、自我を馬の手綱を握る騎手に喩えた。この理論に完全に一致するというわけではないが、馬丁や馬が人間の本能的な衝動や性衝動（＝リビドー）を表していると思えることはできよう。豚小屋から馬丁が突然でてきてとまどう医者に、女中は「自分の家にどんなものがあるか、わからないものですね」と言うが、この言葉はまさに馬丁が無意識の奥に潜む本能的なものであることを示している。馬丁は後先など考えることなくまっしぐらに女中の

ローザに向かっていく。現実原則などおかまいなしに快感原則のままに行動する。また、馬丁が引っ張り出す馬は力強く、生命力にあふれており、すさまじい勢いで疾走する。馬はここでは健康な性衝動(＝リビドー)を表しているだろう。一方、少年の家ではどうか。エネルギーが豊富な馬丁とは裏腹に少年は病気である。医者の家では、馬丁が「どうどう、兄ちゃんよ、どうどう、姉ちゃんよ」と声をかけると、馬が出てくる。馬丁が「そら行け!」と言って「両手を打ち合わせる」と、勢いよく走り出す。馬丁は馬を完全に支配下におき、自在にあやつっていた。しかし、少年の家では馬はおとなしい。少年が馬と関わることはない。逆に馬の方が少年を気づかい、心配そうに見守っている。本能的な馬丁と力強い馬、傷ついた少年とおとなしい馬の対照は、性衝動の対照であると言える。少年の問題は性衝動の弱さにあるのである。

さらに言うなら、馬は男性器そのものを象徴しているかもしれない。馬丁のところでは、二頭の馬が「形のよい頭をラクダのように下げて、胴体をくねらせることによって」出てくる。「ドアは馬の体でぴっちり」となる。「しかしすぐに馬たちは足を伸ばし、体からもうもうと湯気を立てながら、すっと立ち上がった」と描写されている。ここで思い浮かぶのは、ドイツ語の *Hosenstall* という俗語である。これは *Hosenschlitz*, つまりズボンの前開きのことで、ズボンを *Stall* (厩舎) に、男性器を馬にたとえたものである。カフカがしばしば、ドイツ語の言い回しや比喻をそのままイメージ化していることを思えば¹²⁾、『田舎医者』のこの場面でも、馬が男性器に擬されていると考えてもそれほど不自然ではないだろう。「すっと」立ち上がる馬丁の馬とは対照的に、少年の家での馬は、医者が治療をあきらめて逃げ出すとき、「おとなしく窓から首を引っ込め」る¹³⁾。この描写にもやはり男性器のイメージが重なっているだろう。

性衝動の弱さの問題は、物語では脇腹の傷として表現されている。馬丁が操る馬は「力強く、たくましい脇腹 (*flankenstark*)」をしている。それに対して少年には、「彼の右側、腰のあたりに (*in seiner rechten Seite, in der Hüftengegend*)」傷がある。この傷について医者は、「森の中」で、「脇を向き出し」にして歩いていたため、「斧のとがった角で二度打たれてできたものだ」と言う。

カフカの他の物語でも、主人公が同じような場所に傷を受けることがある。『変身』の主人公のグレゴールは父親からリンゴを投げつけられる。

軽く投げられたリンゴの一つがグレゴールの背中 (*Gregors Rücken*) をかすったが、傷を残すことなく滑り落ちた。それに対して、すぐに飛んできた次のリンゴはグレゴールの背中 (*Gregors Rücken*) にぐざりとめり込んだ。¹⁴⁾

グレゴールの体に当たるリンゴは二個である。二個目のリンゴはグレゴールにとって致命傷となる。グレゴールは体を自由に動かすことができなくなってしまい、やがて死に至る。

『あるアカデミーへの報告』の主人公、猿のロートペーターは狩猟探検隊の銃撃を受ける。一発は頬をかすめ、顔に赤い傷跡を残す。ただ、これは軽傷であった。ところが、二発目は重傷となる。

二発目は私の腰の下に (*unterhalb der Hüfte*) 当たりました。それは重傷でした。そのおかげで私は今もなお少し足をひきずっているのです。¹⁵⁾

カフカの物語の主人公たちが受ける攻撃はいずれも二度であり、傷を受けた場所は背中から腰のあたりと共通している。これはカフカのトラウマである¹⁶⁾。背中、脇腹、腰という言葉で表現されているのは性衝動のありかである¹⁷⁾。

(3) なぜ性機能不全？

このように、少年の傷は性の問題と関連しており、それは性衝動の弱さ、性機能不全であると推測できる¹⁸⁾。では何が機能不全をもたらしているのか。それは物語から読み取れるだろうか。

馬丁のローザに対する強襲からわかるのは、性行為が暴力的なもの、力の強い男性による女性の圧伏行為としてイメージされていることである。そして、少年が rosa 色の傷を持っているということからわかるのは、襲われる Rosa が受けるであろう傷を自らに引き受けているということである。馬丁に抱きつかれたローザの頬には「赤い跡となって二列の歯形」が刻み込まれる。少年の傷は「斧 (Hacke) のとがった角で二度打たれてできた」ものである。ローザの歯形と少年の傷にはつながりがあるだろう¹⁹⁾。つまり、性行為の持つ暴力性がカフカを傷つけている。それが性行為に対するカフカの心理的抵抗をもたらし、性機能不全となっているのである。

『父への手紙』に縷々述べられているように、カフカは暴君的な父親の下で萎縮した子供時代を送らざるを得なかった。いわゆる父親コンプレックスである。自分が父親の暴言によって精神的な傷を受けただけではない。たとえば父親が経営する装飾品店の従業員が、店主である父親から激しい叱責や罵倒を受けるときも、そのことで心を痛め、自身の傷として引き受けることがあった。『父への手紙』にはそのときの思いが次のように書かれている。

そしてたとえばくが、取るに足りぬ人間であるぼくが、這いつくばって (unten) 彼らの足を舐めたとしても、主人であるあなた (=カフカの父親) が上から彼らに向かって斧を振り下ろした (oben auf sie loshacken) ことの償いにはまだ足りなかったでしょう。²⁰⁾

ここで注目すべきは、従業員に対する父親の罵倒が「hacken (斧などで) 傷つける」という語で表現されていることである。物語の少年の傷との関連が明白である。カフカ自身が父親の暴言の数々によって「斧」で傷つけられたような思いをしたことは確かである。しかしそれだけではなく、父の罵倒に耐えている店の従業員も「斧」で傷つけられていると感じ、その「償い」をせざるを得ないような気持ちになったのである。子供のカフカが父親によって骨身に染みさせられたのは、人間関係が徹底的な力関係、権力関係によって成り立っているということである。Holz auf sich hacken lassen という慣用表現があるが、これは「(お人好しで) 何をされても黙っている」という意味である。権力のヒエラルヒーによって下位にある存在は、上位の存在がいかに理不尽であろうとも甘受するしかない。カフカの子供時代の体験は、上の引用に続いて「ぼくがここで同じ人間たち (=従業員たち) と結んだ関係は、店の中にとどまらず、将来にまで及びました」²¹⁾ と述べられているように、大人のカフカをも規定している。エリアス・カネッティはカフカを「権力の真の精通者」²²⁾ と呼んだが、人間同士の権力関係がカフカ文学の根本的なテーマとなっている背景にはこのような事情がある。

そして、カフカの権力に対する過敏さが、性に関する領域でも問題を引き起こしていると考

えられる。つまり、カフカには性行為は、男性という上位の権力による、女性という下位の権力に対する暴力的行為に感じられてしまうのである。『父への手紙』でカフカは、自分は「精神的に結婚する能力がない (geistig unfähig...zu heiraten)」²³⁾ と述べているが、身体に異常があるのではなく、精神的問題が身体に影響を及ぼしているのである。

むすび

以上、『田舎医者』を一種の夢として分析し、どのようなカフカの心理的問題が潜んでいるのかを見てきた。この物語はカフカのトラウマの確認とその克服の試みを描いている。カフカの無意識が抵抗を示す意識を導いてトラウマに直面させる。しかし、カフカの意識はトラウマを認知はするが、それ以上どうすることもできずに結局逃避してしまう。カフカの問題となっているのは性機能不全であり、それをもたらしたのは〈父－息子〉関係に由来するカフカの権力関係に対する過敏さである。性行為もまた男性による女性への権力的圧迫、一種の暴力行為と感じてしまうのである。

カフカは 1917 年 3 月に、シェーンボルン・パレーに部屋を借りて移り住んだ。フェリーツェ・パウアーとの結婚後、彼女を迎え入れるための住まいである。7 月にはフェリーツェがブラハに来て二度目の婚約が交わされる。『田舎医者』が書かれたのはこの間の 4 月のことである。いよいよ現実のものとなる結婚を前に、カフカは自身のトラウマに向き合うことで、性的問題を克服しようと模索していたのである。

注

- 1) 1914 年 8 月 6 日の日記。Kafka, Franz: *Tagebücher*. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch, Michael Müller und Malcolm Pasley. Frankfurt a. M. 1990, S. 546.
- 2) Willy Haas (Hg.): *Briefe an Milena*. Frankfurt a. M.: Fischer, 1975, S. 277.
- 3) Sokel, Walter H.: *Franz Kafka. Tragik und Ironie*. Frankfurt a. M. 1976, S. 136.
- 4) Hiebel, Hans H.: *Franz Kafka. Kafkas Roman »Der Prozeß« und seine Erzählungen »Das Urteil«, »Die Verwandlung«, »In der Strafkolonie« und »Ein Landarzt«: Begehren, Macht, Recht. Auf dem französischen Strukturalismus (Lacan, Barthes, Foucault, Derrida) beruhende Textanalysen*. Fernuniversität – Gesamthochschule –in Hagen, Fachbereich Erziehungs- und Sozialwissenschaften 1987, S. 95.
- 5) 1912 年 9 月 23 日の日記。Kafka, Franz: *Tagebücher*, a. a. O., S. 461.
- 6) 1912 年 11 月 1 日の手紙。Kafka, Franz: *Briefe 1900-1912*. Hrsg. v. Hans-Gerd Koch. Frankfurt a. M. 1999, S. 203.
- 7) 『田舎医者』からの引用は、Kafka, Franz: *Drucke zu Lebzeiten*. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann. Frankfurt a. M. 1994, S. 252-261 による。作品はごく短いものなので、本書からの引用については頁数を示さない。なお、訳は拙訳である。
- 8) たとえば『ドン・キホーテ』では、主人公は怒った乙女アルティシドーラから、「あんたに襲いかかって、その目ん玉をくりぬいてやりたいわ！」と非難される。(セルバンテス『ドン・キホーテ』後編 (三), 牛島信明訳, 岩波書店, 358 頁) 女性が他の女性に対して使う場合もあるが、男性に対して、特に恋人に対して使う場合が多い。英語では scratch someone's eyes out.
- 9) ゴーケルは物語末尾の馬車について、「田舎医者の希望のない魂の分裂」を表していると述べて

- いる。Sokel, Walter H.: *Franz Kafka. Tragik und Ironie*. Frankfurt a. M. 1976, bes. S. 135.
- 10) ロバートソンは、「信じられないほど大きくて、ぱっくりと口を開けた、ヴァギナを思わせる身体の傷は、男性が女性器に抱く不安を具体的なイメージにしたものである」と述べている。
- Robertson, Ritchie: *Franz Kafka. Leben und Schreiben*. Aus dem Englischen von Josef Billen. Darmstadt 2009, S. 81.
- 11) カフカは性行為に対して嫌悪感を抱いていた。
- 12) Anders, Günther: *Kafka. Pro und Contra. Die Prozeß-Unterlagen*. München 1972, S. 40-41.
- 13) 二頭の馬がそれぞれの窓から首を出していたはずなのに、ここで首を引っ込めるのは「一頭の馬 (ein Pferd)」となっている。理由は不明である。
- 14) Kafka, Franz: *Drucke zu Lebzeiten*, a. a. O., S. 171.
- 15) Kafka, Franz: *Drucke zu Lebzeiten*, a. a. O., S. 301.
- 16) ここで詳述する余裕はないが、筆者はカフカの二つの傷について、最初の傷はカフカの子供の頃のいわゆるパヴラーチェ体験であり、二度目の傷は思春期の頃の、性の問題についての父親との対話のさいに、父の言葉によって与えられたものであると考えている。両方とも『父への手紙』に示唆されている。
- 17) ロバートソンも、「腰のあたり」という傷の位置は(……) 傷が性の領域と関連していることを示している」と述べている。Robertson, a. a. O., S. 81.
- 18) ロバートソンは「少年は去勢化され (kastriert), 女性化されたように見える」(Robertson, a. a. O., S. 81) と述べ、ヒーベルも「少年の傷は去勢の傷 (Kastrationswunde) でもある」(Hiebel, a. a. O., S. 100) としている。この点では両者は筆者の解釈と一致する。ただ、物語の全体的解釈では筆者と異なる。
- 19) ヒーベルも、ローザの頬の歯形が少年の傷に対応していると見ている。Hiebel, a. a. O., S. 98.
- 20) Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. Jost Schillemeit. Frankfurt a. M. 1992, S. 174.
- 21) Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*, a. a. O., S. 174.
- 22) Canetti, Elias: *Der andere Prozeß. Kafkas Briefe an Felice*. München 1977, s. Vorbemerkung.
- 23) Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*, a. a. O., S. 208.

Kafkas *Ein Landarzt*

—Exempel eines unheilbaren Traumas—

SASAKI, Hiroyasu

Abstract

In dieser Arbeit wird Kafkas *Ein Landarzt* als ein Bericht über einen psychoanalytischen Selbstversuch verstanden. Kafka verspricht sich vom Gespräch mit sich selbst einen tiefenpsychologischen Erkenntnis wie einen Therapiegewinn: was es mit dem persönlichen Trauma auf sich hat, das ihm von Kindheit an zu schaffen macht, und wie er es überwinden könnte. Die Niederschrift dieser in eigentherapeutischer Hinsicht fehlgeschlagenen Psychoanalyse ist besagte Erzählung.

Dreh- und Angelpunkt ist die Vater-Sohn-Beziehung. Seit seiner Kindheit fühlte sich Kafka von seinem übermächtigen Vater bevormundet und unter Druck gesetzt: eine traumatische Kindheits- und Jugenderfahrung, die im späteren Leben teils bewusst, teils unbewusst fortlebt und sich in einer Überempfindlichkeit gegenüber Machtansprüchen aller Art wie einem Widerwillen gegen alle Formen von Machtausübung ausdrückt – ein Thema, das sein Werk wie ein roter Faden durchzieht. Da er die Beziehung zwischen Mann und Frau ebenfalls unter Machtgesichtspunkten betrachtet, überträgt er das Gefühl der Angewidertseins auch darauf, lebt sexuell abstinert und kommt mit dem weiblichen Geschlecht nicht klar.

【Key words】 Trauma, Traumdeutung, Vater-Sohn-Konflikt, sexuelle Dysfunktion